

平成30年6月4日現在

機関番号：35307

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K16776

研究課題名(和文) 書簡・草稿を中心とする高見順資料の調査研究

研究課題名(英文) Study on Letters, Manuscripts, and Other Materials by Jun Takami

研究代表者

小林 敦子 (Kobayashi, Atsuko)

就実大学・人文科学部・准教授

研究者番号：70422912

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本近代文学館の「高見順文庫」を中心に、国内の高見順関連の一次資料を調査し、その概要の把握をすすめるものである。調査の結果、高見順関連の一次資料には、(1)戦前の「大正文学研究会」に関わる書簡群、(2)戦後の「近代日本文学史」の成立に関わる書簡群、(3)戦後の純文学概念の論争に関わる書簡群、(4)戦前戦後を通じた高見の近代史観・アジア観をよく示す構想ノート群、という従来着目されてこなかった重要な特質があることが確認され、今後長期的に取り組む研究計画の基礎的段階を果たすことができた。

研究成果の概要(英文)： This study examines and draws up an overview of primary sources related to the Japanese novelist and poet Jun Takami, with a particular focus on the “Jun Takami Collection” in the Museum of Modern Japanese Literature, Japan.

The survey results confirmed important yet previously unstudied characteristics of primary sources related to Takami, namely (1) a collection of letters concerning the pre-war Taisho Bungaku Kenkyukai (Society for Taisho Literature Research), (2) a collection of letters related to the post-war establishment of “modern Japanese literature history,” (3) a collection of letters related to the post-war debate on the concept of pure (belles-lettres) literature, and (4) a collection of conceptual notes written before and after the war that provide clear accounts of Takami’s views on modern history and Asia. Thus, this study serves as the primary stage of a research plan for investigating these materials on a long-term basis in the future.

研究分野：人文学

キーワード：近代日本文学 昭和文学 思想史 高見順

1. 研究開始当初の背景

(1) 戦後70年である2015年に、没後50年を迎えた高見順は、日本各地で企画展が行われるなど、昭和を生きた文学者の代表として、大きな社会的関心が寄せられた。従来の文学史において高見は、1930年代の転向文学の作家として評価されることが主流であったが、現代では、戦中戦後を含めて、「昭和という時代」をトータルで考えた作家として、その文学的事跡の再評価の期待が高まっていると言える。

高見は極めて歴史意識の高い文学者である。戦後においては、作品において、昭和史及び近代日本史を描くことを試みるとともに、「日本の近代文学の百年」を後世に渡って検証するために、日本近代文学館の設立を広く社会に呼びかけている。日本近代文学館は、貴重資料の散逸を防ぐというアーカイブとしての役割とともに、「近代日本文学」をどのように歴史的社会的に意味づけ、位置づけるか、という文学史の再考の場としての性格が高見によって付与されていた。日本の近代文学研究の原点の一つは、高見順にあると言えるが、近代文学をめぐる戦後の高見の社会的な動きは、これまで十分に検討されてはこなかった。

「最後の文士」として、多くの知識人から敬慕されていた高見の交遊関係は広く、文学者のみならず、社会学者や歴史学者、国外の文化人との知的な交流も盛んであった。そうした高見の文学内外の交流が日本近代文学館の設立運動を大きく推進させた側面がある。高見を中心とする知的な交流を検証することは、日本の近代文学研究の基礎的な部分を改めて充実させる意味があると研究代表者は考えた。

(2) 研究代表者はこれまで、高見順を第一の研究対象として、複数の論文を発表してきた。2010年には単著『生としての文学 高見順論』(笠間書院)を刊行し、従来1930年代の作家として論じられることが中心であった高見を、戦後の活動までもふまえて全円的に捉えることを試みた。この単著においては、高見個人の文学理論の進展を中心とし、高見と他の文学者との相互交流・高見の社会的活動については、十分に検討することができなかったため、本研究において、新たに取り組みたいと考えた。

2. 研究の目的

(1) 高見順は、昭和期を代表する優れた小説家・詩人であるとともに、日本の近代文学の位置づけに関して、社会的に大きな役割を担った人物と言える。文学界内外の問題に広汎な関心を持った高見の知的な交遊は、総体的な社会現象としての近代文学を考える上で極めて重要であるが、書簡等の本格的な調査はまだ一部に留まっている。本研究では、

これまで十分に研究対象とされてこなかった高見順の書簡・草稿等の一次資料を調査し、高見を中心とする昭和期の文学者・知識人の思想的交流と、文学観・文学史の展開の様相を明らかにすることを目的とする。

(2) 日本近代文学館には、「高見順文庫」として、未だ刊行されていない高見の多くの草稿・創作ノート・書簡が保存されている。5000通を超える高見順宛書簡を含む高見順文庫の調査がこの研究の中心となる。

今回は第一次の基礎調査として、高見順文庫収蔵資料の概要を把握することを主たる目的とする。二年間の計画だけにおいては、全体の詳細な調査は完了しないことは明白であるが、単に概要の把握だけで終わるのではなく、期間のうちに今後の研究の方向性を代表する資料を選定し、長期的な研究計画を組む道筋をつけることを目標とする。

3. 研究の方法

本研究は下記のような計画で進めてきた。

(1) 日本近代文学館における高見順文庫の調査

(2) 関連する資料を保存する他の近代文学館、資料館等の調査

(3) 資料の検証と重要資料の選出

(4) 翻刻・公開等の企画構想の提案及び重要資料に基づく報告・研究論文の発表

(1) 日本近代文学館における高見順文庫の調査

1960年代の寄贈分をもとに1976年に作成された目録以降、新たに1998年に寄贈された資料の全体像を把握することから始めた。中心に見るのは、5000通近いとされる高見順宛諸家書簡である。書簡の年代・人物・主旨の傾向の概略をまず把握し、特に文学観をめぐる重要な言説のある資料を抽出していった。あわせて、創作ノートについても、重要なものを確認していった。

(2) 関連する資料を保存する他の近代文学館、資料館等の調査

必要に応じて、関連する文学資料を保存する他の近代文学館、資料館、図書館等も調査し、(1)で確認された資料の裏付けができないか試みた。同時に国内の文学館における近代文学資料の保存・公開状況を確認した。

(3) 資料の検証と重要資料の選出

抽出した資料を、高見の年代に応じた文学理論の変遷、近代文学全体の文学理論の変遷、社会的状況などと照らし合わせながら、その価値を検証し、特に意味があると思われるものの選出を検討した。公開に先立って論拠となる研究発表が必要と考えられた場合、こちらも並行して取り組んだ。

(4) 翻刻・公開等の企画構想の提案及び重要

資料に基づく報告・研究論文の発表

期間内での質的な達成状況を鑑みながら、(3)において選出した資料を論究し、ふさわしい形で公開することをすすめた。

4. 研究成果

本研究は、長期的な悉皆調査に向けた段階的基礎調査として、高見順文庫に関わる資料群の性格の概要の把握と、今後構築されるべき研究主題の方向性を決定することを目的としていた。

まず、本研究期間の調査によって新たに得られた日本近代文学館所蔵の高見順文庫の資料群の重要な性質は、大きく以下のように言うことができる。

(1) 戦前昭和期の「大正文学研究会」をめぐる文学者の文学的立場および関係性を示す書簡群、(2) 戦後における「近代日本文学史」の成立をめぐる高見の役割と、『近代文学』同人を中心とする戦後評論家の「近代日本文学史」描出の過程を示す書簡群、(3) 戦後における「純文学」理念をめぐる文学者の思想的立場を示す書簡群、(4) 高見のアジア観・近代史観を示す草稿群、である。

(1) 戦前昭和期の「大正文学研究会」をめぐる文学者の文学的立場および関係性を示す書簡群

高見順文庫の高見順宛書簡は、戦後のものが多数を占める。しかし比率的には少ないが、戦前昭和期の書簡においても、貴重な文学史的歩みを証明するものがよく認められた。戦前の書簡群は、高見順が中心となっていた『日曆』・『人民文庫』同人からのものが多く、これら雑誌に関わる文学者の研究においては、各文学者の文学観を検証する上で、必須の資料となり得るものである。そこからより大きな意味において重要と考えられるのは、高見とその周囲の文学者が始めた「大正文学研究会」をめぐる資料群である。「大正文学研究会」は、昭和世代の作家たちが、その前世代の大正文学とは何であったかを問い直すために始めた自発的な研究会であり、その「文学史」的視座から、多くの戦後評論家が育っていくこととなった。日本の近代文学研究の一つの源流とも言える会であるが、「大正文学研究会」はその果たした役割の重さに比して研究が進んでいない。時局との関連から実態の詳細を示す資料が残されていないという理由が大きいと言えるが、高見順宛書簡からは多くの重要な文学的やり取りを確認することができる。

(2) 戦後における「近代日本文学史」の成立をめぐる高見の役割と、『近代文学』同人を中心とする戦後評論家の「近代日本文学史」描出の過程を示す書簡群

今後、近代文学研究として最も注目されるべき価値を有していると思われるのが、高見

と戦後評論家の間で交わされた「近代日本文学史」をめぐる資料群である。

雑誌『近代文学』の担い手であった、平野謙、本多秋五ら、戦後文学を牽引した評論家たちの、出発期から円熟期までの思考・関心の過程がよくわかる書簡が多数高見順文庫には残されている。大半が、自身の文学観を語る長文の書簡、あるいは「近代日本文学史」描出をめぐる高見への質問や議論を含む重要な質をそなえた書簡であり、戦後、構築されていく「近代文学史」の様相を明晰に伝える資料と言える。戦後評論家の研究の上では欠くべからざる資料群と考えられ、かつまた高見が戦後文壇の中で、きわめて重要な役割を担っていたことをよく示すものである。ここから多くの日本の「近代文学研究」成立に関わる研究主題を立てることができ

(3) 戦後における「純文学」理念をめぐる文学者の思想的立場を示す書簡群

高見順文庫には、当時の文芸誌編集者からの書簡も多く残されていることがわかった。事務的な書簡のみならず、現代文学の方向性について、高見に助言を求めるものも数多くあり、高見が編集者も含め、戦後文壇をリードしていたことを明らかにする書簡群と言える。特に関係性の深い大久保房男(『群像』編集長)らの書簡には、戦後議論となる「純文学」概念をめぐるやりとりがよくあらわれている。この資料群の検証にあたっては、1960年代の純文学論争の研究が必須と考え、研究代表者は、研究期間内に単著論文「高見順の純文学観—純文学とは何か—」(『二十世紀研究』17号、2016年12月)をまとめ発表した。今後、この研究論文を基礎に資料群を用いた論稿を発表していく予定である。

(1)から(3)は、昭和文学のみならず日本の近代文学研究の立脚点に直接的に関わる貴重な資料群と言え、書簡の往還を把握することによって、多くの文学者、特に戦後評論家の活動と思想をよく明らかにし得るものである。

研究期間内にこれらの研究主題において論稿の執筆と公開を目指したいと考えたが、(1)～(3)の高見順宛書簡群は、長文のものが非常に多くあり、かつ貴重な一時資料にゆえに、調査段階での資料の閲覧・複写に大きく制限があった。複写資料の形で後日検証することができないために、実際に日本近代文学館内で閲覧・判読する長大な調査時間が必要になった。また、書簡群は閲覧は可能とされているが、大多数が著作権の期間内にあり、論文等での公開にあたっては、各著作権者との誠実な交渉が必要な状況である。さらに、近代文学館のみならず、国内の文学館に関連資料(高見順宛書簡に対応する高見順の書簡)の調査にも赴いたが、多くの文学館が、書簡を保管していても、そのデ

データベースの公開にまで至っていない状況であることがわかった。書簡の研究については、対応する書簡をもって検証することが精緻な研究として望ましいが、そのためにはやはり長期間の調査が必要である。

研究遂行の過程で理解された、こうした状況をふまえ、二年間という研究期間内では、上記の条件をクリアして公開に急ぐことは論稿の質を下げる恐れがあると判断し、(4)の高見順の草稿研究において成果の公開を目指すこととした。

(4) 高見のアジア観・近代史観を示す草稿群

日本近代文学館の高見順文庫には、高見順宛書簡ともに、高見の手による小説の草稿と、長編作品の創作ノートが多数おさめられている。これまで草稿や創作ノートが研究対象とされたことはほとんど無かったが、今回の調査で、非常に重要な意味を持つものが存在することがわかった。高見は戦後「いやな感じ」を中心に「昭和という時代」を描く長編連作を構想するが、「いやな感じ」を除き、未完に終わってしまった。これらの連作は、高見文学の集大成であるとともに、「近代日本の歴史」そのものを問おうとしたスケールの大きな試みである。自らの実体験と、文学者としての眼差しで捉えた近代日本史の姿は、歴史学者の近代史像とはまた別なあり方を示しており、その構想が道半ばで終わったことが惜しまれる作品群であった。しかし、今回の調査で、高見がその執筆にあたって歴大な創作ノートを作成していたことが確認され、そこから高見が強く関心を寄せていた事件、人物、思想を詳細に読み解くことが可能であることがわかった。あわせて戦後の連作に先立つ作品群として、戦時下に書かれていた未完の三部作(「東橋新誌」ほか)のノートも存在し、そこに記述された構想も確認することができた。未完の大作を検証する上でも欠くべからざる資料と言えるが、より重要なのはそれらに共通して描かれ高見の近代日本史観、そしてアジア観である。高見は近代日本史を「アジア」と不可分のものとして捉え、東アジア・東南アジア・南アジアへ及ぶ、日本人の広域の活動において近代を描こうとしていることが構想ノートから理解される。この調査で得た知見をもとに、戦時下の連作と戦後の連作の構想から、大陸浪人をキーワードに高見のアジア観を検証した論稿が、共著所収の「拡大の場としてのアジア・流浪の場としてのアジア—高見順の描く近代日本とアジア—」である。

このテーマについても、今後思想史、近代史における視座と比較検討しながら、長期間かけて展開されるべきものであることがよくわかった。近代史とアジアを結びつける高見の視座を確認できたことが、今後の研究の糸口として大きな成果と言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 1 件)

就実大学吉備地方文化研究所(編)、和泉書院『人文知のトポス-グローバルズムを超えてあるいは「世界を毛羽立たせること」』、2018年、147-165。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 敦子 (KOBAYASHI, Atsuko)
就実大学・人文科学部・准教授
研究者番号：70422912

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()